

二十七日記

只今二十一時三十五分、新宿京王線車中。今日もロクな一日じやなかったが、何とかしのいだという感じ。今はしのいでいなければならぬ時なのだ。今日の無為の一日の中に明日の糧があるなんて、お為ごかしの馬鹿は言えない。今日の無為は明日の無為に大方つながっている、のだが……。ところで、ここで一歩踏みとどまって、そんな簡単な無常はイヤだ、ニヒリズムは当然、着衣せざるを得ない近代の衣だが……。背骨のしつかりしないニヒリズム風の私的世界への侵蝕現象はどうしたって許せないと考えをせんじつめると、闘う荒野がそこに出現してしまう。荒野のガンマン太郎助六になってしまう。コレって何言ってるんだろつか。

十一月二十八日 日曜日

九時過新宿に向っている。藤森照信に呼ばれて茅野の高過庵を訪問する予定。藤森じゃなかったら「俺ん家、見に来いよな」なんて仕打ちは許さないのだが、私も鈴木博之先生も「藤森だから仕方ないよ」と思っている。照信のこれが人徳だろう。十時特急スーパ―あずさで茅野へ。鈴木先生とは車内で会う。同じ車輦に松村秀一、富永護氏等が居て、学会賞の審査だと言う。まだそんなモノがあるんだ。鈴木先生と詩人キーツやらの四方山話にふける内に、十二時過茅野着。駅に藤森照信が迎えに来てくれていた。ヤアヤアと、TAXIで藤森宅へ。御両親にお目にかかり、手づ

くりの昼食をいただく。おいしかった。食後、歩いて高過庵へ。神長宮守矢記念館を左手に眺めながら山を登ってゆくとゆく手の守矢山をバックにお目当の高過庵が視えてきた。写真でお馴染みになってはいるが不思議な風景ではある。庵の足許には御柱の元締めの大工が、二人で藤森家の小さな社を作っていた。バリ島みたいな所だ。藤森先生いきなりタキ火を始める。何かと思えば6M上に浮いた茶室にしつらえられた炉の炭にするため。作つたばかりの炭やマホウビン、茶菓子を持って急な梯子を登る。中途の踊り場でクツを脱ぎアトは裸足で茶室にもぐり込む。うわさに聞いていた通り大いに揺れる。不思議な揺れ方である。樹木の力と人間の重みがバランスをとり合っている風情あり。天井のトップライトの黄金ハクが面白い。ミャンマーでこんなの巨大なのを視たな。黄金が藤森の中にあるとは気が付かなかった。大小の窓からの眺望は素晴らしい。ブリーユゲルの絵みたいとの鈴木評は誉め過ぎだけれど。風景の中に居る農夫や農婦のたたずまいの角度が確かに何とも言えず良い。程々の距離に藤森の処女作である神長宮守矢記念館があり、二つ目の藤森作品で風景が少しばかり内部化した。高過庵の影が東に伸びている。鈴木、藤森両氏は流石に史家同士、談論風発だった。私は少しばかり沈黙気味。お茶をいただき、十五時頃地上に降りる。藤森小社はすでにほぼ出来上がっていた。藤森、大工さんと話し合っていた。梯子を外し、藤森、鈴木両氏で運びおろしている姿には思わず笑った。藤森宅に戻り、TAXIで茅野駅へ。ベロベロに酔っていた山田脩二氏と連絡。長野から今、茅野に向かっているらしい、が、山田のこの酔い方は危ないと思い、東京へ逃げる事にした。十八時前八王子。十八時三〇分、高尾のうかい亭で、藤森が夕食をこちそうしてくれた。鈴木博之先生、詩人の入沢康夫について語る。オルフェウ

スを女の立場から唄った入沢の詩を朗唱してくれた。本当にこの人達は変な、しかも正統な才能の持主だな。彼等を越えてゆく若手は出現するのだろうか。彼等と比較すれば私は実に凡々たる者だ。悲哀を感じる。京王八王子より烏山に戻る。世田谷村着二十三時前。風呂にも入らず、すぐ眠った。

しかし、鈴木、藤森両氏共に良く喰べ、良く語る。人物と言える様な人間は、要するにエネルギーだね。私もつられて久し振りに牛肉の分厚いのを食し、その他大食して、気持良いが、体調が心配になるつてところが情ない。しかし、今更、死んでも良いからって、そんな事はしない。そんな事には対面したくはない。当たり前です。何と大げさな書きっぷりでしょう。藤森氏は山の人、鈴木氏は都市の人、それが明快すぎる程に浮き彫りになった一日であった。

十一月二十九日

十時前研究室。シャープとの打合わせ。十一時頃モスクワのTV局突如来室。短い取材。十二時住宅打合わせ。十四時半迄、木場の現場へ。十七時半木場現場定例。十九時前、五反田トモ・コーポレーション。社長&Jrといくばくかの打合わせ。二〇時前修了。地下のレストランで友岡Jrと食事。彼もガキなりに色々と考えているようだ。二十二才位で考える事はほとんど無意味に近いという原理に考えが及ばぬところが、深い浅八力見附なのだがね。二十一時半世田谷村に戻る。

上海プロジェクトは「都市溶融業計画」みたいなものではある。